海の魅力を編集し新しい地域の可能性を生み出す
～渚の交番 SEABRIDGE～

特定非営利活動法人 PLUS 理事長
酒 井　裕 次

1. 課題を抽出し可能性を探る

1．1 地域課題

渚の交番 SEABRIDGE がある広島県尾道市因島地域は、古くは室町時代から村上海賊が活躍し、戦国時代にかけて海の覇者として歴史上の大名たちからも一目を置かれ、現代にいたるまでは北前船の修繕や、造船業まで、海に関わることが地域の営みに発展してきました。夏になると砂浜ではあちこちにビーチがあらわれ、子供たちは学校から帰ると泳ぎにいくという、まさに海は生活の一部として存在してきました。しかし、昭和 47 年の人口ピークを境に、その後昭和の終わりには基幹産業を牽引してきた日立造船の撤退、バブルの崩壊もあり一気に人口は島外へ流出していき、現在はピークの半分以下の 2 万人にまで減少しました。また、生活様式の変化によって海と触れ合う機会も少なくなり、この地域の文化も薄れ、海との関わりと共に、地域は衰退の一途を辿っています。

1．2 渚の交番とは

「渚の交番」プロジェクトは『海辺の様々な活動やそれに関わる人、そして情報を横断するような拠点を整備するプロジェクトです。これにより、地域の海辺をフィールドに活動している団体だけに限らず、地域の様々な団体や活動を横断的に連携させ、点ではなく面で海辺の安全と安心を向上させ、誰でもアクセスできる楽しい海創りに取り組んでいます。』（日本財団ホームページより抜粋　https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/policeoffice　）とあるように、海にもっと慣れ親しんでもらい、関わりを深めようという日本財団が行っているプロジェクトです。「渚の交番 SEABRIDGE」は、このプロジェクトに採択され 2021 年 7 月に尾道市因島にあるしまなみビーチに誕生しました。広島県では初めての施設になります。これにより、私たちは瀬戸内海の十字路にもあたるこの地域で新しい海辺の拠点を作り、海への関わりを深めていくことで衰退した地域の発展につながる活動を生み出そうと考えました。

1．3 目的と手段を整理する

前出した課題から、この地域の大きな課題は、90年代初頭をピークに、以降地域に新しい変化が起こらず時代と共に衰退していき、それに希望を見出せない若者が地域外へ流出、地域の労働力も失われ産業

にイノベーションが起こらないことだと推測しました。そこで、この拠点で新たな気づきを見つけ発信し、日常にはない目線や体験を与えることで、若者を中心に多様化を生んでいけないかと考えました。私たちは、「地域に新しい機会を与える」ことを目的とし、渚の交番 SEABRIDGE を情報発信の拠点と捉えました。それにあたり、まずは若者を中心にこの施設の注目度を高めるため、建築やコンセプト、グラフィックに至るまであらゆるデザインに対して統一したコンセプトを設定しました。それにより、“海の家”になりがちな施設を、遠方からでも来たいと思える目的地となる施設にデザインしました。

2. プロジェクトデザインについて

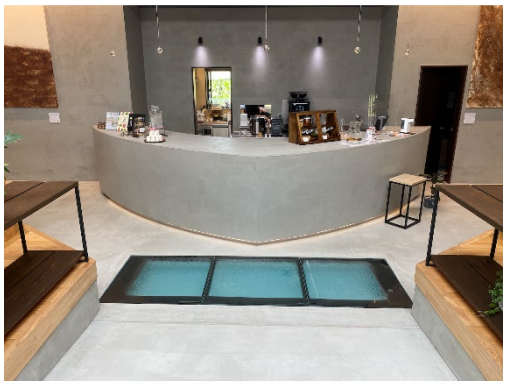
2．1 オリジナルテーマの重要性

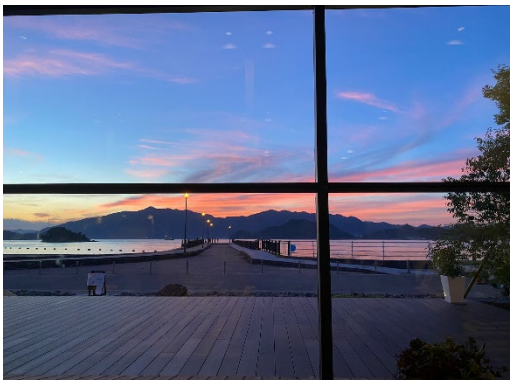
施設を運営するにあたり、集客と滞在時間が必要だと考え、集客としての「カフェ（飲食）」と、滞在としての「絵本ギャラリー（図書機能）」を掛け合わせて、まずは人が集まりやすく、持続的な経営が見込める“絵本ギャラリーカフェ”を施設の中心としました。小説や雑誌のような書籍ではなく絵本を選択した理由は、ターゲットを 10 歳以下の子供がいる 30 代家族を中心に捉えたことと、絵本は子供から大人までジャンルを問わず読める唯一のメディアであり、文字が少なく想像力を豊かに掻き立てるものだからです。まさに、海を眺めながらゆっくりと想像力を掻き立て、1つの物事に捉われない豊かな考え方をする人材育成をしたいと思ったからです。また、他の施設とは違う当社のオリジナルの仕組みとして、絵本ギャラリーの年間利用料として 500 円をいただいております（500 円の内訳は、無料で読める絵本のメンテナンス・修繕費に充てております）。有料会員になってでもこの施設を利用したいと思ってくださる方は、私たちがやるプロジェクトにとても共感してくださり、自発的に情報発信をしてくれるファンになってくれます。私たちは、この「ファン」を大事にし、彼らを通じて情報発信することで、大きなムーブメントを作り、私たちのプロジェクトを輪として前進させることを考えています。それにより、地域に私たちの考えが深く根付いていくことを長期的に目指しています。

2．2 地域の素材を使う

コンセプトに沿って、建築デザインも地域の素材を盛り込んでいます。館内のカフェカウンターは造船をイメージして船体ブロックの船首部分の形をしています。照明は球体ＬＥＤ電球の高さを変えて配置することで、瀬戸内海のキラキラした光をイメージしました。他にも、地元の造船鉄工業の企業にオリジナルの家具を作ってもらったり、建築の主要鉄フレームを造船の技術で溶接してもらったりと、細かい技術部分にも海に関わりのある地元企業の技術が使われています。また、新たな表現として、造船工場で採れた鉄粉

と海の砂を混ぜ合わせ和紙で漉いた「錆和紙」や、地元カメラマンが工場の働く人を撮影した写真など、地場産業と現代アートで組み合わせた新たな表現にも挑戦し、インテリアとして配置しています。





3. 海と関わる接点を作る

3．1 景色には見えないもの掘り起こす。

瀬戸内海に浮かぶ島となれば、海のイメージは海水浴であり、海辺のリゾートを思い浮かべる人がほとんどだと思います。しかし、この海を編集していくと、「村上海賊」「造船」「観光」「資源」「自然教育」があり、アクティビティや観光以外にも、歴史や文化、技術や生活など、さまざまな切り口が見えてきます。私たちは、このコンテンツを「海がくれた物語」と定義し「海を接点に多様化を生む」をコンセプトにしました。そうすることで、海に関わる多くの人たちを地域に呼び込むことができます。それらをこのプロジェクトで一括りに

し集約すること、別の何かが交わることで化学反応が起き、地域に新たなイノベーションを起こせないかと考えました。

3．2 子供たちから興味と可能性を引き出す

最初に取り組んだのは、生活の一部になりすぎて海に関心がなくなった子どもたちの興味喚起でした。地元の大学である福山大学の海洋生物科学科との取り組みです。毎月 1 回のリレー講座を年間を通して渚の交番 SEABRIDGE で行い、大学の先生たちに瀬戸内海の生物、生態についてわかりやすく掘り下げていくワークショップを行なっていただきました。これには子どもたちだけでなく、30 代を中心とした親世代も興味津々で、食い入るように顕微鏡を除いて楽しんでいただきました。泳がない、危ない、と思っていた海の中に、このような面白さがあるということをまずは知ってもらい、学校や家で話してもらうことで、「海」が日常の会話の中に少しでも登場するシーンを作りたいと思っています。結果として、地域大学との関わりも増え、そこから新しい研究の発表の場としても利用してもらうという好循環も期待しています。

4. 目指す未来について

4．1 自分達の強みを活かし未来をデザインする

私たちの強みは、編集デザイン力です。海というコンテンツをあらゆる角度から編集することで人々が海に関わる「関わりしろ」を増やすことは、今まで興味がなかった地域のことへの理解が深まると考えています。それにより少しでも地域外への人口流出を減らしたり、外からの流入が増えることを願っています。

また、コンテンツを増やすと同時に、安全についてのセキュリティ強化も行います。今後は日本ライフセービング協会（ＪＬＡ）とも連携し、尾道だけではなく、しまなみ海道全体の海辺の安全も強化していきたいと

思います。ライフセーバーを配置するだけでなく、自分自身でどうやって命を守るか？を学ぶワークショップなどを考えています。まさに、ここには目の前に広がる砂浜があり、実践をしながら行うことができます。かつてこの地域の人たちは潮の干満や流れを全て把握していたといいます、こういうことも、私たちはただ安全講習を行うのではなく、文化歴史的側面と併せて編集し、楽しませることができます。
再度歴史を紐解くと、やはり海とともに地域が発展してきたことにはちゃんと理屈が存在しています。私たちは、再度それを現代に置き換え、今の時代にあった方法で編集し伝えていき、海を接点にこの地域に新たなイノベーションを生むことをミッションにしています。私たちの夢は、このエリアを海と人とが永続的に関わり共存していくことができる最初の接点となり、ここから沢山のアイデアや交流が生まれ、そしてそれが地域を循環してより故郷が発展していくことです。